

令和7年度第2回八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館運営協議会 議事録

日 時 令和8年2月17日(火) 午後1時30分～3時
場 所 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 研修室
出席委員 山下治子会長 北野博司副会長 清水輝大委員 菅原弘樹委員
今井崇雄委員 豊巻裕史委員
事務局 中村館長 間副館長 小久保副参事 杉山副参事 船場主幹

次第

1. 開会
2. 会議

(1)令和8年度事業計画について

今井委員	八戸市博物館がまるまる今年1年間、26年度は2年間ぐらい休館でしたっけ。そこからの人の流れというか、子どもたちの流れの変化が見込まれているのかということ、性質は違うでしょうけど博物館の補填機能というか、補填的な考え方というか。学校でいろいろ使っていると思いますけど、そういうのがこっちに流れてくるとかあるのかなと。その辺市の博物館との話はありますか。
事務局	アクセスの面で、博物館はバスで行きやすい場所ですけれども、是川となると、というところで博物館に来る予定だった学校が来ているということは特にはないです。 是川縄文館としましては、八戸市博物館に長七谷地貝塚という世界遺産関連資産の展示がございまして、それが見られない状態になるということでしたので、今是川縄文館のほうでこちらの資料を一括でお借りして、常設展示の中にコーナーを設けて、博物館展示の補完ということは行っているところでございます。
今井委員	わかりました。離れていますが十和田の現代美術館も確か3年ぐらい休館で、すごく長い。八戸市博物館2年、十和田の美術館3年間。集客のチャンスかなという気がしますので。意見として。
山下会長	ありがとうございます。他にはいかがですか。

清水委員	教育普及の部分で質問をさせていただきます。これまでこの協議会で、様々な新規顧客の獲得、ターゲットの拡大みたいなどころに関して議論をされてきたかと思いますが、今回の計画の中で、新規ターゲット層へのアプローチみたいなことを意識されている部分ってどのあたりになるのかなというのを伺いたかったです。
事務局	土曜日体験教室の手形・足形というのが、1歳児、2歳児までのこれまであまり縄文館にいらっしゃらない親御さんと子どもさんというところが、一つ新しい狙いになるかと思います。
清水委員	ありがとうございます。ちなみに、ちょっとまた変わってしまいますけど、その意味で、図書閲覧コーナーで勉強している中学生たちですか。あの子たちってどこの中学ですか。
事務局	おそらく是川中学校の生徒さんだと思います。
清水委員	あの子たちをガッと獲得する何かってありますか。すごく可能性を感じていまして。
事務局	獲得というよりも、実は是川中学校、是川小学校、地元の小中学校とは常に密接に連携をしています。是川小学校は1年生から6年生まで全学年必ず毎年ここに来て、いろんな段階を経て、最初は小さい土器づくりから、最後は複雑な土器づくりまで行います。あと中学生になると、我々が中学校のほうに出向いて、中学生が作ったものの野焼きをすとか、あとは毎年ではないですけども、中学校で何かやりたいとなった場合、私と校長先生が相談をして、こういったことで協力できるのではないかとですね。 新年度については、実は来週校長先生とお話をする計画になっていました。今はまだ予定にはないですが、こちらからの出前講座、もしかするとそういったものもあるかもしれません。昨年であると、中学生が縄文館に来て、館長と職員でキャリア教育みたいなものをやったり、様々その年その年によって連携をさせていただいているので、もうすでに取り込んでいるというか、連携をさせていただいております。 小学校の校長先生、中学校の校長先生も、やはり是川の子どもたちにとって、この遺跡というのは誇りだと、地元の宝だと、そう

	<p>いったものを知って育ててほしいという気持ちをお持ちになっていますので、他の学校もよく来ていただいていますけれども、やはり度合いというのは是中、是小が高いです。</p>
清水委員	<p>素晴らしいと思います。ありがとうございます。すごく縄文に関係する、連携みたいなところを精力的にやられているなどよく分かったのと、世界的に最近ミュージアムエデュケーションラインの中で言われているのが、無目的で来る人たちの可能性っていうことを言っていて。例えばここでいうと、縄文が好きだから来るとか、縄文を目的に来るじゃない人をどう作るかみたいなことが結構叫ばれていたりもします。それが先日、論文でも出たりしていました。無目的で自分の目的、要は勉強したくて来るっていう子どもたちが、自分の意志でこの場に来るという。そこでこの辺の視界でどうも縄文がずっとあり続けるみたいな、そこが実はシビックプライドの醸成とか、そのあたりにもかなり寄与しているっていう研究結果が出ていて。中学生が本当にただ勉強したいから来るっていう状態がすごく素晴らしいなというふうに思っていて。なんか、そのあたりは彼らがだんだん勉強するだけじゃなくて、徐々に自分の判断で縄文のほうに行くみたいな、主体的な動きみたいなのがさらに繋げていければいいなと思って、ご質問させていただきました。以上です。</p>
菅原委員	<p>よろしいでしょうか。今のお話を聞いて、我々世代は「考古ボーイ」といっていた最後の世代で、遺跡に行って遺物を拾ったりして興味を持って学んで、そのまま今の仕事に就いたという部分があると思うのですが、今の中学生は我々とは違いますよね。SNSとか、さまざまな形で情報を簡単に入手できて、こういう整った施設がある環境の中で学べる。我々の時代と今の子どもたちとは感覚も全然違いますけども、どんな可能性を秘めているのか、育てていくのか知りたいですよ。</p>
清水委員	<p>そうですね。教育普及のミッションって何だろうなって考えたときに、当然その分野を好きな人をより深みに落とし込む、その沼に落とすってというのは当然ありつつ。一方で、その沼を知らない人たちに対して、どう沼に足を踏み入れさせるかっていう状態が</p>

	<p>大事で。実は後者のほうが、意外とミュージアムの教育普及でやられていないということがあって。さっき言ったカーネギーメロン大学の論文、情報系のミュージアムの論文ですけど、さらっと物理的に縄文を目的としないで生きているっていうのが、自然に縄文のほうに誘引するというか。そういうきっかけになるといいなと思いますね。</p>
菅原委員	<p>あと、もう一つ。是川の小学生が毎年、全学年来ているっていうお話を聞きましたが、博物館にとっては体験メニューのターゲットや内容などを検討する上で、とても良いモニターになりますよね。いろんな体験をとおして、すでにそういうことを意識してやられているのだと思いますけど、興味ある子、興味ない子、低学年、中学年、高学年、何をどれだけできるか、どういう出し方をしたら興味を持ってもらえるのか、そういうのをうまく利用して、より学校との連携を深めていく、学習効果を高めるようなことをやっていけたら良いかなと思いました。</p>
清水委員	<p>子どもって演じる生き物だと思うので、その場に来たらそれっぽい演じをするのですが、本心から本当に縄文を好きになるっていう状態にどう惹きつけていくかっていうところが課題かなとは思いますが。</p>
豊巻委員	<p>まず学校の教員ですので、子どもの話を少しさせていただければと思います。</p> <p>今年度も大久喜小学校という、海のほうの全校生徒26人の複式の小さな学校にあります。今年度もこちらにお邪魔しまして、勾玉づくりをさせていただきました。本校の職員が検討したのですが、八戸線という、久慈のほうまで行くところ、大久喜という駅があって、本八戸駅で降りて南部バスに乗ってここまで来るといいう。どちらかという職員の方は、博物館よりもこちらを一択狙いで、体験もできるということで計画を立てていたようでした。26人のうちの3年生から6年生を6、7人のグループに分けて、それぞれ行かせたうちの縄文コースで、校長は縄文のほうに行ってくださいということで、こちらにお邪魔したところです。勾玉づくりですが、今日持って来てみまして私も皆さんと同じものを作ら</p>

	<p>せていただきました。子どもが作ったものと同じものです。何度も来ていますが、ガイドの方々、ボランティアの方々非常にお話が上手で。子どもたちを選んだ石から褒めるような感じで乗せてですね、日頃褒められないでいるようなやんちゃな子どもも褒められて、非常に陽気になって活動できて、本当に良かったなと思っていました。バスの時間がありましたので、そちらも考えて頂きながら、説明もしていただいて、常設展示も拝見させていただいて、時間通りバスに乗って次の活動地に行くということで、非常に有意義な活動をさせてもらったなと思っておりました。</p> <p>大学生の息子がいるのですが、勾玉を作ったことあるのかって聞いたら、小学校のとき来たと言っていました。ということはおそらくみんながやることができそうな、市内のすべての子どもたちが体験できればいいなと思っておりました。時間が短くてすぐできるので。</p> <p>あとは、もう少し活動が大きいもので私が前に連れてきたのは土器づくりをやらせたことがあります、そちらのほうも楽しくできていたことを今日思い出しながら聞いておりました。またお世話になればなと思っています。よろしく願いいたします。</p>
北野副会長	<p>私も毎回いろんな事業、結果とか計画をお聞きして、特にこの3番の教育普及については、本当に多方面いろんな世代をターゲットにして、複合的にやっておられることはいつも敬意を表しますが、中身が細かいところまでわからない部分もあるので。できる範囲でいいですが。おそらく今の役所はどこでも自己評価やっていますよね。PDCAのサイクル回すために自己評価されて。いわゆるチェック、Cですよ。チェックして何が課題なのかというところを内部的に皆さんどう把握されているのかというのを、全部じゃなくてもこういうところが今困っているとか、こういう課題を考えているということを提示いただくと、少しは経験豊富な方、いろんな立場で関わってらっしゃるのでアドバイスできることもあるのかなと思ったのがまず一つです。</p> <p>ここの特色は本物の考古資料がありながら、それに関わるいろんな体験をたくさんやっておられるということで、体験学習の目的</p>

っていうところがたくさんあると思います。この3つぐらいあるのかな。ここで言うと、布を編むとか土器を作るとか、日曜日に来てパッと予約なしでやる体験とか。土曜日の体験も入れると4つぐらいあります。それぞれ目的・ターゲットが違うと思います。私も若い頃に教育普及担当したときに、学校の先生たちと一緒に企画をする中で、昔なので指導案みたいなものを作って、1時間でこの体験を通して何を伝えたいのかと。確かに勾玉を作ったり火起こししたり土器を作る、そういう工芸体験とか自然体験も含めて楽しいですね。そういう体験をやってないので。

面白さ・楽しさを味わうけれども、こういう埋文センターみたいなところがやる体験学習として、もう一つ伝えることがあるのではないかというのを考えて。そこで考えたのが、例えば火起こしをやって、すごく大変だということを味わうけれど、これは当時の人たち、縄文人は普通にやっていたとか弥生時代の人たちは日常のことでやっていたっていう、なぜかを考えさせると自然素材の選び方、要するに自然物をものすごく熟知していて、火起こしの道具にはどんな樹種がいいとか、火切板の溝をどういうふうに切れば一番つきやすいかっていうことを生活の中で知っているわけじゃないですか。そういう自然の知識と、あとちょっとした巧みですね。体をちょっと前に傾けて重心かけてやると、そんな苦労しなくても手が痛くならなくていいとか。いきなりフルパワーでやるのではなくて、少しずつ温めて、だんだんあるときが来たらちょっと力入れればすぐ火種ができるっていう、そういう自然知と身体技能というのを子どもたちに伝えてあげると、そんな特別なことじゃなくて、なんで今自分たちがそういうことができないのかっていうところを気づかせるというか。そういう現代社会のいろんな生活の違いみたいなものに気づいて、じゃあもっと自然観察したほうがいいのか、自然に触れたほうがいいみたいなどころに持っていきたいというのがあって、そういう指導案を作って先生たちと一緒にやった覚えがあります。

それは全部そういうところがなきゃいけないということではなくて、もちろん短期、日曜日だけ来てやる人たちに伝えること、

	<p>結構大人とか継続的に何回も何回もやる人たちに対してやる指導案みたいなのもあっていいと思うので。そこら辺をある程度、体験を提供する側も意識してやっていくっていうこと、体験教材のブラッシュアップっていうこともやっぱり必要ですよ。ね。だんだんハードル上がっていきますけど、改善することはあると思うので。そういうことを継続的にやる館であるこの強みとして、今後も活かしていくと、全国的にもここでなきゃできないような体験メニューでしたり、指導方法が提供できるのではないかと思います。</p> <p>とりあえずそのことだけはお伝えしたいなと思いました。</p>
山下会長	<p>一つ一つのプログラムについて、ターゲットとかこういうところが課題だっているのが分かると、我々もアドバイスしやすいということですよ。</p>
北野副会長	<p>そうです。特に皆さん経験豊富だし、いろんな事例を知っておられるので。それをなかなか1個1個、中身もあまりわからない中で伝えるのは難しいかなと思ったものですから。我々がその場に立てれば一番いいですけど、なかなかいつも来てられないので。ということでした。</p>
山下会長	<p>分かりました。ありがとうございます。</p> <p>それから、先ほど中学生のようなグループが廊下を通っていましたが、今図書館とかでも勉強している人は多いと思いますが、おそらく私の想像ではこちらのほうが静かでいいとか、図書館だと空間も狭いっていうのもあると思います。もちろんあまり喋るなとか、そういうのもあると思いますが。そういうことで気に入っているというのが1点と、普通の図書館だったら小さな子からお年寄りまでいっぱいいますが、そこにまたいろんな種類の本があると思います。でもこちらはほとんど歴史系の本なので、いろんな歴史にも分野があるし地域もあるっていうのが割とコンパクトな場所で分かると、それが頭で理解するというよりも、体でわかってくるという。そういうところがすごく大事なかなと思います。なにも考古学者になるとか歴史学者になるとかそういうことではないと思います。ただ、自分で体験したその空間を生きるとい</p>

	<p>うか、今日やっているえんぶりとか。自分が積極的にやるかやらないかは別だけれども、そういうのがあったということで自分の誇りとか、それから地域への愛情とか、そういうものが醸成されていくのかなと。</p> <p>第3の場所ですか、そういう場所が求められているので、学校でもなく家でもなく、でもみんな一生懸命やっている所という、そういうふうな場所になることも大切かなと思いました。サードプレイスですね。</p> <p>他はよろしいですか。</p>
今井委員	<p>余談ですけども、今の関連で。なんで今日ここにあの子たちがいるかっていうと、えんぶりの日で学校全部休みです。市内全部。見てきたかもしれないですけど、時間があつたら皆さん街中に行けばえんぶりをやっていると思います。金曜日までやっていると思うので、ぜひご覧いただければと。</p>
山下会長	<p>すごいですね。800年前から続いていると聞きましたが。800年って言ったら江戸時代より前ですよ。室町、すごい。</p>
今井委員	<p>本来だったら参加しろとか見ろという意味の休みだとは思いますが。</p> <p>もう一点。3ページの6の、資料保存修理のところの、風張遺跡土偶1点っていうのは、国宝の合掌土偶のことですか。</p> <p>このニュース性というか、定期的に2、3年に1回やっているものなのか、それとも指定されて初めてのものなのか。</p>
事務局	<p>国宝土偶については、指定されて初めての修理になります。</p>
今井委員	<p>取材するような案件というか、そのうち予算が通ったら取材させますので。</p>
北野副会長	<p>もう一点お聞きしたいんですが、教育普及の中でクリーンデーっていうのがありますよね。これどんな内容か少し教えていただけますか。ずっと継続してやっておられますよね。</p>
事務局	<p>基本的に夏と秋の2回やっておりまして、夏はゴミ拾いをして、秋は落ち葉がかなり多いので、史跡内から道路のほうに出てくる落ち葉の掃き集めの活動をしています。</p>

	<p>今年度は2回、夏と秋と開催できました。天気が悪いと中止になったりします。チラシと町内会のほうで回覧も回していただいて、それを見た近所の方も手伝っていただくってというような形です。1時間ぐらい清掃活動をして、その後学芸員の案内で、そのタイミングでやっている企画展・特別展をご案内する形でやっております。</p> <p>今年の夏はそういう形で地域の方、秋は是川地区の企業さんにも来ていただいて一緒に掃除をして、展示を見て帰るっていう形でやっていました。意外と、学芸員が企画展をご案内しますってというのが今年はずごく人気があって、通常、企画展のとき毎週土曜日にギャラリートークはやっていきますけども、そういうタイミングを合わせてきたわけじゃないけど、ちょっと体を動かして参加したついでに、みんなで展示見て説明してもらって帰るってというのが、すごく良かったという話を皆様されていらっしやいました。</p>
北野副会長	<p>なるほど。史跡の整備活動の中で、この清掃活動というか、場所によって違いますが、どこでもやっています。これは史跡の管理者の助けにもなる、清掃って必ず管理で伴ってきますからね。お金払って業者にやってもらったりすることも多いし。そういう管理の意味もあるけど、やっぱりこの教育普及、その史跡に愛着を持ってもらうための活動として、これから整備されていけば整備された場所の管理も当然いっぱい出てくるので、このボリュームを少しずつ大きくしていくっていう取り組みはやっぱりあちこちあります。今おっしゃったように、ただの労働だけになってしまうと、もうすぐ嫌になるので。大体どこでも1時間、2時間、長くて史跡によっては半日ぐらいやっているところはありますが。その中で、メリットが必ずないと人は来てくれないので。今回のお話聞くとそうやって学芸員が案内して展示の詳しいところまで説明してくれるってというのが人気だっていうのは、まさにそういうところだと思います。これを今後もっともっと広げていく。やっぱりリピーターももちろんだけど、新規層にどうやって集まって頂けるかっていうところを工夫しなきゃいけない。</p>

	<p>今は近いところの方が中心のようですけども、やっぱり市内・県内からも来ていただくための方法でしたり、企業の方も参加されるってようなことなんですけども。</p> <p>私も今関わっているところは、山間部なので倒木とか、山形は雪降るので倒木とか落枝とか枝がいっぱい落ちますが、それを処理するために造園屋さんがウッドチップの機械を持ってきてくれて、その場で処理して史跡の中に敷きならして、循環的な清掃活動にしたりしているのもとっても好評で、もう10年ぐらい続いています。それで、新規は少ないですけど10年やっているとなんかやっぱり新しく入ってくる人がいて、また口コミで友達連れてきたりします。その活動の中で学習もやります。2時間ぐらい汗かいて、山の中なので植物、あるときはシダの先生が来て、やたらシダの細かい種類を教えてくれたり、その地域の郷土史の方が10分、20分、長いと30分くらい、そこに座っていろいろレクチャーしてくれたり。そういう学習っていうのも一つの要因としてある。</p> <p>今回、ここの場合は展示解説がまさにそういうことだと思うし。欲を言えば、食ってというのが伴うと、また人集まりますよね。ここは幸いちょっとしたレストランもあって、有料にしたらいいと思いますけど、参加費500円ぐらい出すとここ独特のものも食べられるっていうとより広く集まると思います。単なる清掃に留まらず、そういう学習意欲ある人であったり、地域貢献意欲があったり、その多様な層を呼ぶための一つのイベントとしてとても可能性あると思うので、今後ぜひ検討していただけたらありがたいなと思いました。以上です。</p>
山下会長	ありがとうございます。これは何人ぐらいの方が参加されますか。
事務局	一般の方は10名から15名くらいで、あとは企業さんが10名ぐらいいらしたり、うちのボランティアさんも参加していただいたりという形で、大体全体としては20名から、職員含めて30名ぐらいで清掃しています。
北野副会長	企業の方が参加されると、新聞に書いていただくと企業のPRになるので喜ぶますよね。そういうイベントやったときに記者を呼

	<p>んで、取材してもらおうといいので。そういう宣伝の仕方もあるかなと思います。</p>
菅原委員	<p>地域貢献とかそういう意味もあるし。企業や市のいろんな契約とか、発注なんかにそのポイントが加算されるとか。</p>
山下会長	<p>そうですね。地域貢献になりますね。</p>
菅原委員	<p>よろしいでしょうか。ここでは本当にいろんな教育普及活動とか、共同研究とか計画的にやられていて、新たな切り口で研究して、その成果を展示や講演会など発信するというのを繰り返しやられていて、これは他でなかなかできないことをやられていると思います。体験などの教育普及活動については、ある程度やるのが固まってきて、それを改善したり、バージョンアップしたりという段階なのだと思いますが、長くやっていると職員の中でなんとなくマニュアル化されてしまう。最初作り出していくときは、みんなで一緒にいろいろなこと考えたり、ああだこうだと議論しながら作り上げていくのですが、それが出来上がってきて、そこに次の世代が入ってくると、作り上げた第一世代と第二世代の間で意識が違ふとか、なんとなく仕事としてマニュアルをこなす方向に行ってしまうとか、そういったことってないですか。嫌な聞き方ですけど、私のところでもそうところがあって、参加者は敏感に感じるようです。</p>
事務局	<p>確かにそういう面はあります。ただ学芸員も担当が変わるとまたゼロから学び直して、到達してまた担当変わって、ということでもあります。そこまでルーティン化を本人の中でしているかどうかはわかりません。ただ大きな節目としまして、気候が非常に暑くなり、ボランティアが高齢化して土器の野焼きが非常に危険になってしまって、熱中症のリスクが非常に高まったということもあって、焼かない粘土の体験にほとんど切り替えをしています。それが一つの契機となって、学芸員も入って、(粘土も使った体験について) 粘土は何がいいのか、焼かない粘土を取り寄せて全部試すなど、そういうところで一回組み直しというか、リセットがかかった感じがします。ボランティアが自分で作りたい作品は今まで通り野焼き要の粘土を使いますが、今体験に来る方は、そ</p>

	<p>の日に持って帰れるように焼かない粘土に切り替えるという形で、更新が図られています。</p> <p>新しいメニューというものも今開発がされていって、だんだんボランティアもやってもいいよという段階になりつつあるような形になっております。</p>
菅原委員	<p>今史跡の整備を進められている中で、これから遺構復元とか、整備後の活用について考えられているのだと思います。整備は言うまでもなくゴールじゃなくて、そこから先のほうが長くて、維持管理をお金かけてやらなければいけない中で、活用していかないといけないのだと思いますが、これまでやってきてある程度コンプリートされたようなものだけじゃなくて、整備後を見据えて、ここらしいなにか新たなメニューというのを、みなさんで考えられて今から進められたらいいかなと思います。</p> <p>あと、うちもそうでしたけど、整備の期間が長くなると、その話題性や重要性、すごい事業をやっているってところが市民に伝わらなくなってくるような気がします。そういった意味でやはり発信っていうのが必要で、発信するといってもただ計画を発信するのではなくて、遺跡の新たな発見が必要なのかなと思います。整備をやると大体発掘調査ってしなくなってしまいますけど、是川の遺跡の整備をしていく中で、遺跡に関する新しい発見という発信が必要ではないかという気がします。それは多分整備の委員会の中でもそういった意見って出ているのではないかと思います、遺跡の活用は発掘の成果があってのことで、その成果を発信して、活用にも生かしていくという遺跡活用のルーティンをもう一歩上げて進めていけたら、是川らしい、ここでしかできないことに繋がっていくのではないかなというふうに、それは私もずっと言われ続けたことではありますけども。ぜひそのあたりを意識して、整備と並行してやられたら良いのではないかというふうに思いました。</p>
山下会長	<p>ありがとうございます。補足は大丈夫ですか。</p>

	<p>情報発信の仕方っていうところですよ。整備のことだけじゃなくて、逆に違うキャラを作ってなにかやるとか。そういうのもあるかもしれません。</p>
菅原委員	<p>動いている博物館というか、発見のある遺跡、博物館という情報ですよ。</p> <p>やっぱり一般の人もそこに注目すると思います。「あ、それを整備するのか」という。すみません、自分を棚に上げて偉そうなことを言いました。</p>
北野副会長	<p>余計なことかもしれませんが、やっているとなんでもそうですが、どんどん拡張していきますよね、教育普及も。私もふと立ち止まると、どこかで引いていくとか、まとめていく職員の作業量もうまく減らしながら改善していくとか。結局自分たちが疲弊していくような方向にだけはならないでほしいです。あれやこれや言いますが。その議論って内部でどんなふうに認識していますか。もう結構一杯いっぱいのような気がしますけど。</p>
事務局	<p>5月のゴールデンウィークは、滑石のペンダントというものを例年やっていますが、今年度は参加者がなかったので、仕切り直さじょうという判断をして、5月は違うメニューを探したところ、八戸市博物館が休館中なので、これを入れようかという、そういう話し合いをしています。やはり募集して参加がないってことは非常に大きなことだと我々も思っています。すぐに話し合いをして、作戦会議を繰り返しながら、入れ替えとかタイミングをずらすなどということをやっているところです。</p> <p>縄文土器づくり講座なども、今までは野焼きを考えたりして10月にやっていましたが、実際作り上げて焼くのは3月になるので、10月に急いでやらなくてもいいのではないかと、そういう意見も出たりして。じゃあちょっとずらそうかと、もうちょっと空いている時期にじっくりやったほうがいいのではないかと。そういう話し合いしながら、既存のものを活かしながら組み替えるなど、あるいはちょっと1回休んで考え直そうかというふうに今は考えています。</p>

北野副会長	<p>先ほど先生もおっしゃいましたけど、こちらのサポートスタッフの方々がだんだん育ってきて、そういう指導もかなりできるようになってきているっていうのは成果でしょうし、そういうものをうまく使いながら、ぜひ拡張したものをどこかでまとめ上げるとか、見直すとか、そういうベクトルがないとずっと惰性でやってしまうようなことだけは無いように、ぜひお願いしたい。余計なことかもしれませんが、お願いします。</p>
清水委員	<p>僕もちょっとだけよろしいですか。教育普及の担当として。教育普及の件で、実際企画をやるとか、ワークショップをやるとか、講座をやるイコール教育普及ではないというところがポイントかなというふうに思います。</p> <p>やっぱり場を設計するとか、空間をデザインするみたいなところが教育普及に近いかなというふうに思っています。例えばワークショップをやる、新たにどんどん増やしていくと、やっぱり先生おっしゃられたように結構ギリ貧な状態になってしまいます。今科学館でスタッフが考えているのは、本当にスタッフが少なくて全員私忙しいって人しかいなくなっちゃっていますけど、その中でどうするかっていうときに、例えば中学生が勉強しに来たときに、その周りに何を置いとくかとか。</p> <p>我々の失敗談ですけど、人を展示する科学館っていうコンセプトを持っていて、要はうちの館のスタッフとまず仲良くなってもらうっていうことをコンセプトにしているのですが、それ振り切っちゃってスタッフはもう事務室にいるとかいうスタッフが出てきて。スタッフが展示室とか全部に個別の机を置いて、その周りで中学生が勉強しているみたいな状態になりました。そうすると、当然僕も現場に立たされるわけなので。僕、一応館長ですが、子どもたちから「しみてる」って呼ばれているので、「しみてる」来たみたいになって。うわ、館長だったのかってなるのですが、失敗談としてそうすると事務室スタッフの仕事の効率が下がります。ほとんど仕事ができなくなります。一方で、科学が好きだっていう子どもたちではない子がたくさん来るようになりました。「しみてる」と遊びに来るとか、もう本当にパジャマ</p>

	<p>で遊びにきて今日何しているのみたいな感じで。今日ちょっとポケモン行ってくるみたいな、そんな話をするだけですけれど。やっぱり潮流として、その分野を好きな人たちだけでもミュージアムは成り立たないっていうのは世界的な潮流であって、わかりきっていることですが、そこに対してどういうアプローチをしていくかっていう視点に立ったときに、それはもしかしたらワークショップをやる事じゃないかもしれないですよ。ワークショップは興味のある人しか来ないので。そうすると一石二鳥ですけど、もう仕事している姿を見せるとか、あとは僕ちょっと見たことないですが、小久保さんの一番かっこいい姿は、スーツかっこいいですけど、スーツじゃなくて作業着のほうがすごくかっこいいかもしれないですよ。そうすると絶対子どもたちからすると、小久保さんから「こくぼん」になるはずですよ。なんかそういうアプローチを考えていくとすると、もしかしたらさらにその新しいタッチポイントみたいなものが、醸成されていくかもしれないなというふうには感じます。そうするとワークショップしなくていいので、その工数も削減できて一石二鳥だったりしました。</p>
<p>山下会長</p>	<p>ありがとうございます。そうですね。いろんな取り組みがあると思いますけれど、スタッフの得意なところを披露してもらいたいなこともありかもしれませんね。</p> <p>関西のある博物館に行ったとき、研究者じゃない職員ですけど講談が得意でした。それでワークショップというか、人が集まるイベントをやったときには着物を着て、そこで博物館に関する講談を自分で作って、それでポンポンと語り始めて。さすが関西かなって感じはしましたけども。周りのスタッフもその講談に関係するような、虫の着ぐるみを着たりして盛り上げるというそんな感じ。そうすると、やはり今までにないファンを取り込むことができるっていうのはありますね。</p>

(2) その他

○地震被害と施設の改修について

山下会長	今のご説明についてご質問などありますか。開館から15年になるので、やはり展示の中でのグラフィック的なこととか、色んな時代とともに、昔のものは使えないとかそういうところも出てくると思いますので、そういうちょっとした見直しというか、子どもの目の高さにするとか。大きなことではないかもしれないんですけど、小さな心配りっていうのですかね。ここ変えましたみたいな小さな話題でもマスコミなどへの提供になるかもしれません。
北野副会長	一点教えてほしいのですが、6強の地震で。展示品はおそらくそれなりの対応をとっていたはずなのですが。収蔵庫に入っているような埋蔵文化財の収蔵展示みたいなのも多分あると。ああいうものにも何にも被害なかったのか。だとしたら、どういう対応をとっておいでだったのか、少し教えてほしいのですけども。
事務局	基本的に重心が上にあるものはテグスをかけておりますし、棚にはテグスを張るかベルトで飛び出し防止をしているおかげで、被害がなかったです。
北野副会長	収蔵庫の棚には、そのベルトを全部。
事務局	全てではないのですけれども、重要文化財はベルトをつけておりますし、展示品はテグス張りとしりを入れることで。
北野副会長	展示品はいいのだけど、なんか収蔵庫のイメージをすると「あれで全然6強で被害なかったのかな」って逆にすごく不思議で。それは日頃からちゃんとそういう対策をされていたということだと思うのですけど。ですよね。承知しました。ありがとうございます。
今井委員	南郷は6強だったけど、市内になるにつれて下がってきて市内は5強、是川は南郷に近いから6弱か。
事務局	是川に住んでいる人たちの話聞くと、意外と是川は被害が少なかったようで、もしかすると地盤の関係なのか山の関係なのかと。
山下会長	本とかは落ちなかったですか。
事務局	ちょっと浮いて何冊かは落ちていましたが、そこまでは。図書館のような形にはならなくて。押し込めて大丈夫でした。

山下会長	なんか図書館とかの映像とかテレビで映っていましたが、かなり本が落ちて唖然としていました。結構この図書室も本がたくさん高いところにもありますしね。
事務局	滑り止めのシートを棚に敷いていたのも良かったのかもしれないです。
菅原委員	全部対策されているのですね。